

令和俳句論考

蒲生 友紀子

省略を凝らしとうすみとんぼかな

西宮 舞

読初の『誕生』今も古びざる

(第六句集『白雲』より)

「春暁や目覚めて夫のぬぬ不思議」「手術へと指輪を外す寒さかな」読み始めてこれらの句に出会い、胸が痛んだ。あとがきには「主人を亡くされ、新型コロナウイルス禍の籠りが重なり、そして病発覚と、世の中から遠ざかっておられたとある。それらの事実も淡々と句にされておられる姿勢、是非倣いたいと思った。掲句一句目は、とてもシンプルである。だからこそ俳句なのだと痛感する。「とうすみとんぼ」の細く凜として小さい身体。それは「省略を凝らし」ていると作者は言う。小さくともしっかりとある存在感。二句目、『誕生』は、鷹羽狩行氏の第一句集である。鷹羽狩行が主宰した「狩」に氏は創刊入会されている。氏の令和七年の読初である『誕生』は昭和四〇年刊行、同年の第五回俳人協会賞を受賞されている。「今も古びざる」と師の作品をきっぱり言いつけるのは、作品はもちろん、師への深い敬愛に溢れている。

氏は「香雨」創刊特別同人。

国和ぐを願ひしわが名終戦日

栗坪 和子

水は夜もほの明るくて雁渡る

(第一句集『海嘯』より)

「稿を待つ鎌倉に月上がるまで」「瓢の実を机に鱒二先生留守」冒頭の二句である。氏は、新潮社で定年まで編集者として書籍製作に携われたそう。あとがきには「俳句の源流は、編集者時代の先生方から示唆いただいたように思います。」とある。一句目、終戦の年に生まれた氏の名前は「なぎこ」と読む。一九八四年に加藤楸邨に師事。そして二〇一七年に「沖」に入会。二句目、確かに水は夜でもほの明るい。その水の上を雁は渡ってくる。雁は夜も飛び続けるそう。氏は現在の千葉県鋸南町のご出身で海や空を詠まれた作品が印象深かった。「鳴き了へて蟬の魂魄のこりけり」のような感覚的な句にも魅了された。他に「その先の逃水を追ひ近江まで」旅吟の作品も目にとまったが、この句のように、実際でも空想でも、ふっと足を伸ばして「近江まで」行ってしまうような心持ちにも心引かれた。

氏は「沖」蒼茫集同人。

風邪の児を抱く風邪の身の乱れ髪

雫 逢花

春菜摘む地の温もりの膝頭

(第一句集『夏椿』より)

「ひまわり」会長の西池冬扇氏の序文によると「逢花」の俳号は禅語「逢花打花逢月打月」に因るもので、対象物に同化するという俳句の極意とも言え、氏の覚悟を示されたのでしよう。とある。一九四一年生まれの氏は、最近ご長男に職を譲られたそうであるが、耳鼻咽喉科の医師であったそう。一句目は「乱れ髪」から母親をイメージした。その母親も風邪の身、なれど自分の装いな

ど後回して我が子を必死で連れてきたのである。それを句に留めた氏の視線も温かい。二句目、焦点化された中七下五の措辞が臨場感があり、春の空気感を揺るぎない物にしている。離職後「俳句という『連れ』があつたことは幸運」とあとがきにある。「草取るやかつて金魚を埋めし場所」など益々の御健吟を祈念します。氏は「ひまわり」幹部同人。

つと駆ける子らの野辺より夏は来ぬ

くろせ行雲

仏飯はいつも炊立て終戦日

(第一句集『今生の一刻』より)

氏は現在八十歳を越えられ、六十歳を前に故郷富山に戻られて平成二十四年に「辛夷」に入会されたとのこと。十二年間を三年ごとに四期、四章に分け、句の並び順は『角川俳句大歳時記』の季語の掲載順に従ったそうである。一句目、広い野原を思った。そこを子どもたちが駆けている。そして作者はそこから「夏は来ぬ」と感じたのだ。「つと」という表現が子どもの動き、作者の思い両方を伝え、「夏は来ぬ」にかかつていく。躍動感・生命力を感じさせている。二句目、当たり前の景のようにも思えるが、季語の「終戦日」がとても生きていと感じた。「戦中生まれ戦後育ち」とあとがきに書かれており、この句は亡くなられた方を思う作者の矜持のようにも思える。句集名になった「今生の一刻青き踏みにけり」にも「今生」を俯瞰するような大きさを感じた。氏は「辛夷」同人。

俳句てふ逃水を追ふ月日かな

岩男すみお

螢火の縫うては解く溪の闇

(第一句集『小綬鶏』より)

氏は退職の三年後に、句集上梓を目標として俳句を始めたそうである。一句目、一読して頷いた。まさに「俳句てふ逃水」である。「逃水を追ふ月日」である。しかし、その月日が辛くもあり、また喜びでもある。「まんさくや一句つくるに百句反古」と謂われるが、三〇〇句の句集であれば一〇〇〇句は必要と言われ、結果二〇〇〇句の中から編まれたそうである。二句目、「縫うては解く溪の闇」の措辞に引かれた。特に、静かな呼吸のような、源氏螢の大きな明滅を思った。あの明滅の間合いをどのように表現するべきか、という筆者の長年の課題の解を頂いた思いである。

氏は「轍」同人。

サングラス表通りに出てかける

木村 瑞枝

鬼灯をぐにゅぐにゅと又ぐにゅぐにゅと

(第一句集『色鉛筆』より)

ご主人を亡くされた苦しさの中、二〇一七年に友人に句会に誘われて始めたそうである。師の大崎紀夫氏の序文を読むと、立ち直るきっかけを俳句が担っていたことがわかる。一句目、「表通り」が利いている。裏通りが見えてくるからだ。そこはサングラスを必要としない暗さがあり、内向きの顔がある。対比が面白く響いた。二句目、鬼灯の絮(実)を取り出している情景と思う。筆者も子どもの頃にこの経験がある。母がそのあとを引き受けるので、ただぐにゅぐにゅとしていた。俳句として、臨場感があった。

氏は「やぶれ傘」会員。

(筆者住所 〒309-1622 茨城県笠間市南吉原二七九一五)